

## 2.5 1次独立と基底

定義 2.18 ベクトル空間  $V$  のベクトルの組  $v_1, \dots, v_k$  が次の性質をもつとき 1 次独立 (*linearly independent*) であるという: 「スカラー  $c_1, \dots, c_k$  に対し

$$c_1 v_1 + \dots + c_k v_k = \mathbf{0}$$

が成立していれば  $c_1 = \dots = c_k = 0$ 」

係数がすべて 0 のときはいつでも 1 次結合のベクトルが 0 になる。この定義はその逆が成立する場合に名前をつけたものである。

演習問題 2.13 次のベクトルの組が 1 次独立かどうか調べよ。

$$(1) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

$$(2) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ a \end{pmatrix} \quad (a \text{ は定数})$$

$$(3) v_1 = \begin{pmatrix} a \\ a \\ a \end{pmatrix} \quad (a \text{ は定数})$$

$$(4) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$$

$$(5) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}$$

$$(6) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ q \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ p \\ 3 \end{pmatrix} \quad \text{ここで } p, q \text{ はある定数。}$$

$$(7) v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \end{pmatrix}, v_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, v_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \\ q \end{pmatrix}, v_4 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ p \end{pmatrix} \quad \text{ここで } p, q \text{ はある定数。}$$

演習問題 2.14  $x_1, x_2, x_3$  は 1 次独立とする。  $y_1 = x_1, y_2 = x_1 + x_2, y_3 = x_1 + x_2 + x_3$  に対し,  $y_1, y_2, y_3$  は 1 次独立かどうか調べよ。

このプリントも含め講義関連のプリントは <http://math.cs.kitami-it.ac.jp/~kouno/kougi.html> においてある。

また  $y_1 = x_1 + x_2, y_2 = x_2 + x_3, y_3 = x_3 + x_1$ , に対し  $y_1, y_2, y_3$  が 1 次独立かどうか調べよ。  
 更に  $y_1 = x_1 - x_2, y_2 = x_2 - x_1, y_3 = x_1 + x_3$  に対し  $y_1, y_2, y_3$  が 1 次独立かどうか調べよ。

$k = 1, 2, 3$  の場合 1 次独立が何を意味しているか具体的にみよう。ここでは  $V = R^3$  とし, 幾何的イメージも考える事にする。

最初は  $k = 1$  の場合:  $v_1$  に対し  $c_1 v_1 = 0$  から  $c_1 = 0$  が出てくるための必要十分条件は  $v_1 \neq 0$  である。即ち 1 個のベクトル  $v_1$  が 1 次独立である必要十分条件は  $v_1 \neq 0$  である。生成の記号を用いて書くと  $v_1$  が 1 次独立である必要十分条件は  $\langle v_1 \rangle \neq \{0\}$  である。

次に  $k = 2$  の場合:  $v_1, v_2$  が 1 次独立である場合,  $v_i \neq 0$  ( $i = 1, 2$ ) はすぐに分かる。また 2 つのベクトルが平行だと  $v_1 = \alpha v_2$  と書けるので 1 次独立ではない。逆に 2 つのベクトルが平行でないとき  $c_1 v_1 + c_2 v_2 = 0$  が成立していると  $c_1 = c_2 = 0$  となるの。よって 1 次独立である必要十分条件は 2 つのベクトルが並行でない事である。

生成の記号を用いて書くと  $v_1, v_2$  が 1 次独立である必要十分条件は  $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle$  が成立する事である。

$k = 3$  の場合:  $v_1, v_2, v_3$  が 1 次独立である必要十分条件は 3 つのベクトルが平行 6 面体の 3 辺になっている事である。1 次独立を否定すると,  $c_1 v_1 + c_2 v_2 + c_3 v_3 = 0$  かつ  $c_1 \neq 0$  または  $c_2 \neq 0, c_3 \neq 0$  が成立する。 $c_3 \neq 0$  とすると,  $v_3 = -\frac{c_1}{c_3} v_1 - \frac{c_2}{c_3} v_2$  と表す事ができる。このとき  $v_3$  は  $v_1$  と  $v_2$  が張る平面上に存在する。 $c_1 \neq 0, c_2 \neq 0$  の場合も同様に行うことができる。生成の記号を用いて書くと  $v_1, v_2, v_3$  が 1 次独立である必要十分条件は  $\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2 \rangle \subsetneq \langle v_1, v_2, v_3 \rangle$  が成立する事である。

今の議論を一般的に述べると次の命題が得られる。

命題 2.19 ベクトル  $v_1, \dots, v_k, v_{k+1}$  について次の 2 つは同値。

- (1) ベクトル  $v_1, \dots, v_k, v_{k+1}$  は 1 次独立である。
- (2) ベクトル  $v_1, \dots, v_k$  は 1 次独立であり,  $v_{k+1} \notin \langle v_1, \dots, v_k \rangle$  が成立する。

証明 (1) $\Rightarrow$ (2) 定義より  $v_1, \dots, v_k$  が 1 次独立なのは明らか。もし  $v_{k+1} \in \langle v_1, \dots, v_k \rangle$  とすると, 実数  $a_1, \dots, a_k$  が存在して  $v_{k+1} = a_1 v_1 + \dots + a_k v_k$  となるが, このとき

$$a_1 v_1 + \dots + a_k v_k + (-1)v_{k+1} = 0$$

となり, 1 次独立性に矛盾。

(2) $\Rightarrow$ (1)  $v_1, \dots, v_{k+1}$  が 1 次独立でないとする, どれかは 0 でない実数  $a_1, \dots, a_k, a$  が存在して

$$a_1 v_1 + \dots + a_k v_k + a v_{k+1} = 0$$

が成立する。ここで  $a = 0$  とすると  $v_1, \dots, v_n$  の 1 次独立性に反するので  $a \neq 0$ 。よって移行して

$$v_{k+1} = \left(-\frac{a_1}{a}\right) v_1 + \dots + \left(-\frac{a_k}{a}\right) v_k$$

が得られ,  $v_{k+1} \in \langle v_1, \dots, v_k \rangle$  となり矛盾。■

演習問題 2.15 次を示せ。

ベクトルの組  $v_1, \dots, v_n$  が 1 次独立で必要十分条件は「任意の  $i = 1, \dots, n$  に対し,

$$\{0\} \subsetneq \langle v_1 \rangle \subsetneq \cdots \subsetneq \langle v_1, \dots, v_{i-1} \rangle \subsetneq \langle v_1, \dots, v_{i-1}, v_i \rangle \subsetneq \cdots \subsetneq \langle v_1, \dots, v_n \rangle$$

が成立することである。

$e_1, e_2, e_3$  を基本ベクトルとする。即ち

$$e_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, e_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, e_3 = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

とする。任意の  $K^3$  のベクトル  $v$  に対し, スカラー  $x_1, x_2, x_3$  が唯 1 組存在して  $v = x_1 e_1 + x_2 e_2 + x_3 e_3$  と表す事ができる。この様な性質を持つベクトルの組は基本ベクトルに限らない (演習問題 2.16 参照)。ここでは部分空間に関してその様なベクトルの組を考える。

定義 2.20 ベクトル空間  $V$  に対し次の性質をもつベクトルの組  $\{v_1, \dots, v_n\}$  が存在する時これをこのベクトル空間  $V$  の基底 (base) と呼ぶ。

- (1)  $v_1, \dots, v_n$  は 1 次独立である。
- (2) ベクトル  $v_1, \dots, v_n$  は  $V$  を生成する。即ち  $V = \langle v_1, \dots, v_n \rangle$  が成立する。

演習問題 2.16 次のベクトルの組がベクトル空間  $V$  の基底である事を示せ。

(1)  $V = \mathbf{R}^3$  で, ベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}$

(2)  $V = \mathbf{C}^3$  で, ベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 8 \\ 4 \end{pmatrix}$

(3)  $V = \mathbf{K}^3$  で, ベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$

(4)  $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x + y + z = 0 \right\}$  で, ベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$

(5)  $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{C}^3 \mid x - 2y + z = 0 \right\}$  で, ベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$

(6)  $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^3 \mid x + y + z = 0 \right\}$  でベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$

- (7)  $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \\ w \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^4 \mid x - y + z + w = 0 \right\}$  でベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 1 \\ 3 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \\ -1 \end{pmatrix}$
- (8)  $V = \left\{ \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} \in \mathbf{R}^3 \mid x + y + z = 0, x - 2y + z = 0 \right\}$  で (1 個のベクトルからなる) ベクトルの組は  $\begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}$
- (9)  $V = \mathbf{K}^n$  で, ベクトルの組は基本ベクトル  $e_1, \dots, e_n$

命題 2.19 により  $v_1, \dots, v_n$  が  $V$  の基底であるとは極大な (他の  $V$  のベクトルを加えると 1 次独立でなくなる様な) 1 次独立なベクトルの集合である事が分る。つまり,  $v_1, \dots, v_n$  が  $V$  の基底である必要十分条件は次の 2 つが成立する事である。

- (1)  $v_1, \dots, v_n$  が 1 次独立である事。つまりスカラー  $a_1, \dots, a_n$  に対し

$$a_1 v_1 + \dots + a_n v_n = \mathbf{o} \implies a_1 = \dots = a_n = 0$$

が成立する。

- (2) 極大である。つまり, 任意の  $V$  のベクトル  $v$  に対し

$$v, v_1, \dots, v_n$$

は 1 次独立でない。

これは基底を見つける方法を与える。  $V$  をベクトル空間とする。

$V = \{0\}$  の場合は特別である。基底が存在しないとも考えられるが, 例外があるのはいやなので空集合が基底と考える事にしよう。

$V \neq \{0\}$  の場合は 0 でないベクトル  $v_1$  を 1 つ選ぶ。次にベクトル  $v$  で  $v, v_1$  が 1 次独立なものを捜す。  $\langle v_1 \rangle = V$  ならこの様なベクトルが存在せず,  $v_1$  が基底になる。  $\langle v_1 \rangle \subsetneq V$  のとき, 1 次独立なものが存在するので, それを  $v_2$  とする。次にベクトル  $v$  で  $v, v_1, v_2$  が 1 次独立なものを捜す。  $\langle v_1, v_2 \rangle = V$  のとき, この様なベクトルが存在せず,  $v_1, v_2$  が基底になる。  $\langle v_1, v_2 \rangle \subsetneq V$  のとき 1 次独立なものがするので, それを  $v_3$  とする。次にベクトル  $v$  で  $v, v_1, v_2, v_3$  が 1 次独立なものを捜す。以下この事を続けていく。後で証明するようにこのステップは有限回で必ず止まる, 即ちある  $n$  に対し  $v_1, \dots, v_n$  が  $V$  の基底なる。

$$\text{ベクトル空間 } V \text{ が } V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^4 \mid x_1 + x_2 + x_3 + x_4 = 0, x_1 + 2x_2 + x_3 - x_4 = 0 \right\}$$

の様な形で与えられているときは, 連立 1 次方程式の解をパラメータ表示することにより, 基底「候補」を求めることができる。この例を考える。係数拡大行列は  $A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 & 1 & 0 \\ 1 & 2 & 1 & -1 & 0 \end{pmatrix}$  な

ので基本変形を実行して  $B = \begin{pmatrix} 1 & 0 & 1 & 3 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & -2 & 0 \end{pmatrix}$  に変形する。よってこの解は

$$\begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -x_3 - 3x_4 \\ 2x_4 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} = x_3 \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + x_4 \begin{pmatrix} -3 \\ 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

と書ける。ここで  $v_1 = \begin{pmatrix} -1 \\ 0 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $v_2 = \begin{pmatrix} -3 \\ 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$  とおく。この  $v_1, v_2$  を基底候補に選ぶ。あとは

実際に基底になっていることを示せばよい。

次にベクトル空間  $V$  が  $V = \{v_1, v_2, v_3\}$  の様な形で与えられている場合を考える。ここで  $v_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$ ,  $v_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ ,  $v_3 = \begin{pmatrix} 3 \\ 1 \\ 2 \end{pmatrix}$  とする。 $v_1, v_2, v_3$  は  $V$  を生成しているので、 $v_1, v_2, v_3$  が 1 次独立なら  $V$  の基底になる。しかし今の場合  $v_3 = 2v_1 + v_2$  が成立しているので、1 次独立ではない。この関係式から  $v_3 \in \langle v_1, v_2 \rangle$  が分かり、 $V = \langle v_1, v_2 \rangle$  となる。 $v_1, v_2$  が 1 次独立なら  $V$  の基底になる。今  $v_1, v_2$  は 1 次独立なので  $v_1, v_2$  が基底になる。

演習問題 2.17 次の部分空間の基底を 1 組求めよ。

$$(1) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^3 \mid x_1 + 5x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(2) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^4 \mid x_1 + 2x_2 + 3x_3 + x_4 = 0 \right\}$$

$$(3) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^3 \mid x_1 + 4x_2 - x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(4) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ x_4 \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^4 \mid x_1 + 4x_2 - x_3 + x_4 = 0, 2x_1 + 8x_2 - 2x_3 + x_4 = 0 \right\}$$

$$(5) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^3 \mid x_1 + 4x_2 + x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + x_3 = 0, x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(6) V = \left\{ \mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} \in \mathbf{K}^3 \mid x_1 + 4x_2 + x_3 = 0, 2x_1 + 3x_2 + 2x_3 = 0, x_1 - x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$(7) v = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} -1 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ -3 \end{pmatrix} \right\rangle$$

$$(8) V = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 2 \\ 2 \end{pmatrix} \right\rangle$$

$$(9) V = \left\langle \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \end{pmatrix} \right\rangle$$